

野に仏・里に仏

大谷 眞

第二回目の旅・その二

行き暮れた雨の海岸でピバーク

5月3日 晴れ後曇り、夜には雨

朝4時半起床。5時半には鯖大師の護摩堂へ。朝の勤行は初めてだけあって何もかもが物珍しかった。終了後、しびれた足をさすりながら食堂へ行く。全員そろったところで祈りの後、朝食となった。昨夜と同じく同席したMさんに本日の予定を聞く。

「佐喜浜ぐらいまでは歩きたいんですが……。でもまだ宿も決めてません。」昨日独りで飲んでいたアルコールが、まだ抜け切れて無いような雰囲気である。

「じゃ、お気をつけて。ひとあし先に立立しますから。」

人によって歩くスピードは異なる。自分のペースで歩こうと思えば、一人でしか歩けない。それ

でも今日一日、同じ道を歩くのだから、途中でまた会えるだろう。部屋に戻り荷物をまとめ、係の女性に礼を述べた後、鯖大師を後にした。

歩きながら考えた。第二十四番最御岬寺までの残り60キロを、今日どこまで消化できるだろう。後発のMさんに追いつかれると、足の痛さにめげて途中で挫折しそうな気がする。しかし、徳島から来る列車の最後の駅「甲浦」を過ぎてしまえば、もうおいそれと帰る訳にもいくまい。この駅を越えるまでは頑張つて歩こう、そうすれば、もうあとは腹をくくって、何が何でも二十四番まで歩かざるをえなくなる……。幸い

昨夜Mさんにいただいた薬で、足の具合も少しは楽な気がする。左手には太平洋が広がり、雄大な

景色に足の痛みも紛れるが、車の道の単調さは変わらない。最初の10キロ程は頑張つて歩いた。が、そのうち疲れてきて、がっくりとペースが落ちた。

11時頃やっと「甲浦」駅を通過した。もうこれで簡単には引き返せない。しばらくして、お昼のための買い出しをすませ、店の前でザックに積めていると、

「大丈夫ですかー！」とMさんが通り過ぎた。私もすぐ後を追う。100m程先を行く彼をペースメーカーがわりに、もくもくと続いた。

途中、路側帯で夏蜜柑やハツサクを売る露店の前にさしかかった。と、道路の向こうから、

「お遍路さんー！」

と声がかかった。目をやると、お店の奥さんがここにこしながら、手招きをしている。車に気をつけて、あわてて道路を横切つたところで、

「はい、お接待。夏蜜柑、持つてつて！」

と渡された。二つを手にしてお礼を言おうとする、今度は隣の店の奥さ

んがポンカンを持ってやって来た。先の人と食べてね、と言われる。あまりの多さにためらっていると、

「なーに、食べたなら無くなるから大丈夫！」と、二人で悪戯っぽく笑いなが袋に詰めてくれた。

あわせて7個、ありがたくいただいて、お礼もそこそこにMさんの後を

追った。既に彼ははるか彼方を歩いている。追いつかねばこの重い夏蜜柑とポンカンを一人ですぐにかせねばならない。必死でペースを上げ追いかける。しかし焦っても焦っても距離は縮まらない。やがて彼がトンネルに入り、ちょうど車の途切れたところで、もうこしかない、と声を張り上げた。

「Mさんー！」

大声で呼ぶと、やっと彼は後を振り向いた。トンネルを出たところで、何事？と言っ顔で待っていたMさんに追いつき、事情を説明し彼に半分を手渡した。やれやれ。ところが無理をして歩いた分、こんどは痛くて足が前に出ない。しかたなく彼には先に行ってもらうことにした。

しばらく様子を見て、恐る恐る歩き始める。最初の一步がうめくほど痛い。それでも我慢して歩き続けると少しましになった。しかし痛みは今や足の裏のみめだけでなく、足の甲、アキレス腱、向こう脛、膝関節と各所に広がっていた。まめをかばいながら歩いて来たせいか、脚全体に無理がかかったのだろう。

途中、昼食のため、神社で小一時間ぼんやりと過ごした後、また歩き始めた。しばらくして橋を渡る。上流にも古い橋が見え、見るとMさんが少し遅れてさしかかったところだった。道は行けども行けども単調なまま続く



ている。暑さのせいであらう喉が渴いた。水筒の水は既に底をついていた。あたりにには自販機どころか人家すら無い。たまりかねて途中、水の音に誘われて「法海上人堂」と標識のある小径を山の手に分け入った。小さなお堂の横に流れる谷川の水でコーヒータをたて、ようやく人ごちついた。

さらに2時間ほど歩く。閉店中のドライブインの前に、ポツンとたった自販機が見えてきた。その前に二人の人影があり、近づくと、一人はMさんだった。カブに乗ったおじいさんと立ち話をしてるところだった。「あれえ？とっくに先を行かはずとんとんと思うてました。」

としているあたりは神社らしい。あの軒を借りれば、今夜の宿になるかも知れない。この先、尾崎の民宿で予約がとれたと言ふMさんとここで別れとなった。

「またどこかでいつか、一緒にできればいいですね。」

「そうですね。お元気で。」
今日一日、抜きつぬかれつ、Mさんだったが、最後は一緒に歩いて良かった、そう思いながら彼と握手して別れた。

国道から神社の裏手に出る。広い境内にりっぱな社があり、社の前に板張りの空間があった。軒を借りて野宿するには絶好の場所と思えた。ただすぐ隣には人家があり、無断での借用はさすがに気がとがめた。といって、許可を得て泊まるのもわずらわしい。時間もまだ早すぎる。しばらく迷った末、あきらめてまた先を進むことにした。不安が少しずつ胸の中で広がり始めていた。

この後、国道からそれて、細く続く集落の中を歩いた。魚の焼ける匂い

や、窓越しに一家で夕食を取る姿が垣間見えた。私はいったい何をしているんだらう。

と、ふと情けなくなった。今夜の宿もない、夕飯とてザックの中の非常食が頼りで、まさに浮浪者さながらのていたらくだ。足の痛みは限界に近い。わびしさがひしひしとこみ上げてきた。

集落を抜けると、後はまた、山と海と車の道だけの単調な道のりとなった。日はだんだん暮れていく。焦りがしだいに強くなった。しばらく行つたところで、海岸に降りる階段を見つけ、ふらふらとここを降りた。海岸は道路から数メートルほど低く、ここなら人目を気にせずビバークできそうだ。一晩なら天候ももつかもしれない。しかし海岸に降りたものの、砂浜などどこにも無い。波打ち際から2、30m程の幅で、小ささままな岩がごろごろと転がっているのみだ。あきらめて、背丈ほどの岩陰を利用し、ポンチョを一枚のシート状に広げ、これをタープ



の替わりとした。一方の端を岩にかぶせ、飛ばないように上に大きな石を置く。他方は地面に広げ、これにも大きな石を据えた。岩と地面との間に作られた三角形の空間にもぐりこみ、下には別のシートを敷いた。とりあえずこれで雨の心配は無いだろう。曇り空のお陰で、夜もさほど冷え込まないことを祈るばかりだ。

明るいうちにと、湯を沸かしてスープを作り、ビスケットをほおばった。やがてあたりが暗くなり初めてから、ポツポツと

ポンチヨに雨があたり始めた。これなら防水は完璧、お尻の下の玉石が少々痛むが、我慢できない程では無い。足の手入れもしたいが、消毒をするには不十分、と考え、我慢することにした。

9時頃、雨脚は次第に強くなり始めた。気温もどんどん下がりはじめ。ザックから衣類を取り出し、着れるだけ着込んだ。風も出始めた。バタバタとポンチヨが風にあおられる。足元が冷たいと思ったら、ポンチヨの首の部分から雨が漏り始め

ていた。とりあえず荷物をまとめ、いつでも撤退できるように準備をした。次第に風が雨を含み、横の空間からも吹き込み始めた。足元に敷いていたシートを広げて杖で押さえ、吹き込む側に張る。万が一の時にと持参していたレスキューシートで体を包んだ。が、すきま風が入って、思うように体温が上がりえない。それでも少しうとうとした。

ドスン、ドスンと波が砕ける音と、ざつ、ざつと激しく雨がポンチヨをたたく音で、はっとまた意

識が戻る。波打ち際の岩にあたる波の音が、一段と大きくなったような気がする。満潮になったら、もしかしてここは危険なのでは、と、不安も頭をよぎる。

12時を過ぎる頃、事態は最悪となった。もたれていた岩の上から、雨水が伝って落ちてくる。気が付くと背中がべつとり濡れていた。ふと、海岸の方から、時々女性の笑い声が聞こえるような気がした。今の時間、そんなばかな、と思うが、耳をすますと、波の碎ける音に混じり、確かに数人の女性ที่笑いながら作業しているように聞こえてくる。あまりのリアルさに、ポンチヨの下から顔を出すのが、無論何も見えない。もしや海岸で海苔でも取っているのだろうか、とぼんやり考えるが、また次の瞬間、この時間、この天候ではあり得ない、と気がつく。笑い声はしばらく続いた。不思議に恐怖感は無かった。そつとまた外をうかがうと、闇の中で、海岸に打ち当たる白い波が、遠目に見えるような気がした。その白

さが、しだいににじり寄るような錯覚に陥る。そんな中で、またうとうとと眠りにおちた。

5月4日 雨のち曇り

闇の中でヘッドランプを点けて時計を見る。既に午前1時を回っていた。3時になったら、ここを出発しよう、と決心する。ずつと座ったままの姿勢で、体が固まってしまつたように痛んだ。背中も濡れてゾクゾクとする。

2時半頃、固形燃料を足元に置き、火をつけて湯を沸かした。熱いコーヒーが体にしみていくのがわかる。雨が少しましになつたところで急いで撤収をした。ザックを背負い、タープ代わりのポンチヨに中から首を突っ込むだけだからこれは早い。

海岸から道路まで上がる階段がしばらく見つからず、焦った。やつとの思いで道路に出たところで、雨がまた強く降り始めた。風もひどくなり、ポンチヨの横から吹き込んで、裾をまくり上げる。昨日、手いれをしていないぶん、すぐに足がまた痛

み始めた。幸い防水のお陰で、靴の中までは染み通っては来ない。

山と海に挟まれた、何も無い国道を延々と歩く。ヘッドランプの細い光の筒が、風にあおられ、飛散する雨を闇から浮かび上げさせている。思い出し、たように、ときおり車が水を跳ね上げ、横をかすめて走り過ぎた。

光の中に標識が浮かび、最御岬寺のある室戸岬まで12キロ、と読めた。12キロと言えば、通常でも3時間の道のり、気が遠くなりそうだ。歩き始めは、6時頃には最御岬寺に着くだろう、と安易に考えていたが、今の状況では、無限の距離を歩んでいるような絶望感だけがあった。

雨も少し小降りになつた頃、民家が少しかたまっていてる地区にバス停を見つけた。トタン板に囲まれた畳一枚程度の待合所もある。隙間から風は入るが、明るくなるまではここで休んだ方が良さだろ、と中に入った。向かいのガソリンスタンドの自販機で缶ジュースを買って戻り、ベンチに

座って飲んでいるとカツパ姿の男が一人、ぬっと入って来た。

「・・・あ、おはようございます。」

地元の人にしては随分早いバスに乗るんだな、と思ひながら声をかけると、

「おはようございませう。昨夜はどこに泊まられたんですか？」

挨拶を返して男が言う。暗くて顔は見えないが、まだ若そうな声だ。

「佐喜浜から少し来た所で野宿したんですが、雨にやられて、仕方なくここまで歩いて来ました。」

聞くとも彼もお遍路だという。昨夜は、今、私が座っているベンチに寝たのだそうだ。ところが雨がひどくなり、車を通る度にしぶきをかけられ、寝れないまま、向かいのスタンドで、ひさしを借り朝を待っていたのだと言う。

「実は、今日の朝一番の高知行きのバスに乗って、もう千葉に帰ろうと思っているんです・・・。」
「ここまで所々、列車やバスを利用したが、基本的には歩いて来た。でもここまで来て、もういい、も

う充分だと思った、と疲れた声で彼は続けた。かなり精神的に参っている様子だ。無理も無い、この一晩で私も精根尽き果てた心持ちだった。

「失礼ですけど、お声が若いから、学生さんですか？」

「いえ、社会人ですけど。」
「そうですね。真つ暗で顔も見えないから、ごめんなさい。」

「良かったら、その懐中電灯で照らしてください。」
ライトを彼に向けて、短く刈った頭に、細面の若い男が浮かんだ。

「・・・ところで焼山寺へは山越えの道を歩かれましたか？」

と唐突に彼が聞く。ええ、と答えると、

「長戸庵の熊さんに会いましたか？」

と言う。また熊さんか！彼はよほどの有名人なんだ、と苦笑しなくなった。

「ええ、会いました。一晩一緒に話をしましたよ。」
それから、あの夜のいきさつを彼に話した。

「あの人のこと、どう思いますか？」
何だ、Mさんと同じことを言うなあ、と思いつつ、

これには直接答えず、「どうしたんですか？何かあったんですか？」

と逆に聞いてみた。彼は少しためらった後、あまり人には話したくなかったのですが、と重い口を開いた。

彼はあの長戸庵に何日か滞在したそうだ。聞くとも、まだ他にも若者がいたことがある、と言う。まだ若い彼にすれば、熊さんに強烈な感化を受けたのだろう。自分というものがまだ確立していない人間なら、彼の個性の前では受け身にならざるを得ない。そうしてブルズルと何日か足止めを食らったようだ。数日後、若者は長戸庵を去るようになる。いつまでもここにどまる訳にはいかない。長戸庵は四国のまだ序の口なのだ。出発の段になって、世話になったお礼の意味で、所持金の内から、幾ばくかを彼に支払うことになる。言わば熊さんの生きざまに対する援助と考えてもよい。ただしこれが、若者の気持ちから素直に出たことなら問題は無かった。収入の当ての無い熊さ

んにとつて、ただ一つの収入を得る方法は、通りかかる人からの「援助」なのだ。ただその「援助」が、彼からの申し入れの結果だとしたら、そしてその要求が、人によつては脅迫としてしか感じられなかったとしたら……。ましてやそこは、一日のうちで、一人通りかかるかからないほどの山の中だ。

元来、仏に仕える僧は、人の心を癒すことでその存在の意味を持ち得た。そして、逆に人々は僧たちの生活を支えることで、彼らの生きざまを肯定した。お互いが持ちつ持たれつ、自然な共存が成り立つて来た。しかしやがて時代は移り、人々は「金」という新たな信仰の対象を持った。これにより、お寺と人の関係にも変化が生じた。人はお寺に現世的な利益を求め、その報酬をお寺は金子という形で得ることとなつた。

熊さんにすれば、人を救つという使命に燃えて、あの朽ちかけた庵にとどまり、既に三年もの歳月が過ぎた。それが彼の独

善による結果であつたとしてもだ。しかし、彼の感化を受ける人にとつては、ただそれは、ともすれば「親切な熊さん」「尊敬する熊さん」で終わつてしまいがちだ。彼らにすれば、具体的な何かを、熊さんから受け取らない限り、彼に金品を差し出すつもりなど毛頭無い。我々の日常では、それは「好意」に過ぎないのだ。いつのころからか、我々の心の中では、どれほどすばらしいものであつても、目に見え、手に取れなければ、価値を価値として認めがたくなつていく。ところが、そうは思わないのが熊さんだ。なぜなら、

彼は人さまの援助あつて糊口をしのいでいけるのだから。長戸庵の押しかけ庵主にとつては、どこから給料など出る訳がない。ここが人によつては彼との間に摩擦がおきるゆえんだらう。

若者は、自らにとつては過大な大金を置き、長戸庵を去り、その足で警察に駆け込んだ。しかし、警察が何をしてくれる訳でも無い。せつかくのお遍路も、これにつまずき、

心の中がくすぶつたままここに至り、昨夜の野宿で打ちのめされ、あえなく挫折、という図式が見えた。

空は白み始め、彼のふさいだ顔が今はうつすらと見える。何と慰めたら良いのだらう。とにかく私の考えを述べることにした。どのような方法でも、どのような言い訳ができて、強制された「援助」は限りなく犯罪に近い。この若者の言葉を全面的に信じると思えば、熊さんに非はある。現に彼は、こうしてこの若者を救つてはいない。人を救うことが、熊さんにとつての仕事なら、救えなかつた彼から報酬は受け取れないはずだ。ただ、いきさつは二人の間で起こつたこと、双方の「事実」は、互いにとつての都合な「事実」に過ぎない。警察が腰を上げなかつた理由がここにある。

「お話しできて良かったです。少し気が晴れました。」
心なしか、すこしほつとしたように彼が言った。やがて高知行の一番バス

がやって来た。小さなリュックを肩に、彼はバスに飛び乗った。窓際の席に座り、私のほうを見て、さみしそうに微笑んで小さく手を振った。

さらに歩き、7時半を回った時点でとうとう一歩も歩けなくなった。次回また来るときのため、バス停の名をノートに書き留めた。今回はここで「打ち止め」とした。

通り過ぎる瞬間、Mさんの顔が一瞬だけ見えた。彼はまだ頑張っている！遠ざかるバス停を見送りながら、心から彼にエールを送った。

雨がほとんど止み、明るくなり始めた道をまた歩き始めた。今は一歩一歩がづらい。バス停がある度、足を休めた。もはや痛みは耐え難くなった。立つことすらづらい。時刻は6時を回った。標識には、室戸岬まであと8キロとある。この数字を、絶望的な思いで眺めた。

甲浦までのバスにゆられながら、海を見続けた。歩いているときは足の痛みで海など見ている余裕など無かった。ごうごうと波が岩に砕けている。あの海岸で、よくビバークしたものだ、と今さらながら思った。あの若者と話をしたバス停の前を

